
春の訪問者

あざみの茶太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春の訪問者

【Nコード】

N8631S

【作者名】

あざみの茶太郎

【あらすじ】

春の終わり、山小屋でひとり生活する僕のもとに訪問してきたのは、年下の女性であった。
不可解な彼女と、ほんの数日間の共同生活が始まる。

閉じたまぶたに火影がちらつくのは毎夜のこと、それはいつも定刻に現れた。この真夜中に起こされてもさほど苦痛に感じなかったのは、その光のせいで深夜目が覚めてしまうことに身体がすっかり慣れていたせいである。

僕が夜更けの訪問者に気づいたのは、そいつがなかに押し入ろうと鍵の掛かった玄関の戸をがたつかせたときで、その強腰の姿勢はまさしく風の仕業でもなければ小動物のいたずらでもなかった。

熊のような獣の類か、まさか物の怪ではあるいか。不安ながらも玄関の戸を開けたのは、強引な手段を諦めたそいつがおとなしく戸を叩くさまはいかにも人らしく、打ち鳴らす音にいくらかの健気さを感じたからだ。

「はい。どちらさまかな」

開けられた戸の向こうから屋内に舞い込む外気は五月といえども冷たい夜に抱かれていただけあって肌に冷たく、そこにいたのが物の怪か化け物であってもおかしくないほどにさえ感じさせられた。

むしろその方がまだ合点が行くといったところで、女性が一人訪れるのにこんな真夜中の山小屋ほど適さない場所はなかった。

「女の子一人でこんな時間にどうしたの」

正体が明らかでない謎の訪問者。本当は怖かった僕は、それでも見栄を張る。ただのひとことから、相手が足のある人間であることを確認しようとしながらも、決して臆していないことを誰とも知らない彼女当人にしっかりとアピールしたのだ。

「あの、ごめんなさい。まさか人がいらしたとは思っていなかったもので……」

彼女は小さな身体に不釣り合いの大きな寝袋と、これはまたバランスの悪い小さなリュックを背負って、静かな闇のなかにいた。

「なにはさておきなかへどうぞ」

彼女はこくりと頷いて、静かに片開きの戸を閉めた。

暗いままにしていた奥の部屋の明かりをつけ、自分の座った向かいの椅子をその彼女に勧めた。

彼女は、ありがとうございます、か、すみません、みたいなことをぼそぼそ言いながら、恭しく籐椅子に腰を下ろした。

暗がりで思い浮かんだ鬼婆や妖怪はまさに幻で、彼女は人工の明かりの下で若さを取りもどした。年の頃は僕よりも四、五歳ほど下の十九か二十歳といったところか。

「登山かなにかしていて道に迷ったのかな？」

訊いておいて、そんな馬鹿な、と胸が反駁を加える。この辺りは、下の村の人もたまに狩猟に訪れる程度のへんぴなところで、誰が好きこのんでこんな山に登りに来るだろうか。

「いいえ、あの、ええとですね」

身振り手振りでなにかを表そうとあたふたする彼女の様子は、まさにあたふたという音に当てはまる。

「わたし、連休を利用して山ごもりしに来たんです」

「ああ、そういえばゴールデンウィーク」

今ごろの季節、ここから遙か下の方にはそんな習慣があった。と、そんなことよりも、細い身体ひとつと『山ごもり』なんて突飛な発想とを持ち合わせたちくはぐな彼女は、さつきからそわそわとして目を泳がせている。

「もう遅いし、まずまず休もうか。寝具はないけど空いている部屋はあるから、そこで寝袋にくるまって眠るといいよ」

しかし彼女はなかなか強情で、ここで結構です、の一点張りにほほと困り果てた。

たかだか木を重ねただけのような小屋だ。この広いリビングルームは冷えこみが厳しくとても寝られた場所ではないのだが、彼女はどうやら『寝場所を借りられるだけで幸せですつ、部屋まで侵害するなんて、そんなッ』といった心境にいるようで、どちらかが折れないとこのまま朝を迎えかねないという危機感から、仕方なしに

彼女の意見を通すことにした。

朝になつて頭がもうろうとしていたのは、そんなこんなで睡眠時間が削られたせいであつて、寢室を出たところで彼女の細腕を踏んづけそうになつたのには正當ないわけがついたことになる。

彼女はどんな物音にもまったく反応することなく、ついに昼近くまで眠りこけていた。それで起き抜けに、「朝は特に冷えこみますね」なんて言うものだから、僕は思わず吹きだしてしまった。

やっと腰を据えて話せるかと昼飯を用意したときにも、「食べ物を持つてきたのでどうぞお構いなくッ」とか下手に気を遣つてくるものだから、今度こそ堪りかねて、そんなに筋張らないで、となるべく穏やかに懇願したのだった。

彼女がリュックから取り出したカップ麺とお湯入りのポットを少し強引に取りあげて、一応それらしい形になっている山菜料理をテーブルの上に広げた。

「名前がまだだつたね。僕は朽木」

彼女はテーブルを挟んだ向こう側に座る。

「あ、申し遅れました。わたし継美つて言いますつ。あの、昨晚は本当にごめんなさい。玄関の戸を壊すところでした」

「うん。誰もこんな小屋に人が住んでいるとは思わないだろうからね。しょうがないよ」

彼女は申し訳なさそうに、首を横に振つたり、平手を前に出して激しく揺らしたりした。

「それにしたつて、夜にその恰好じゃ寒かつたんじゃないかな？」

「ええ、それはもう。わたし、寢袋があれば草の上でも茂みの陰でもどこでだつて寝られると思つていました。でも、いざとなると寝るのにいい場所が見つからなくて、ずつとろろろしていたんです」

寢袋で寒さは防げて、山中にころ寝では落ち着かないだろう。

「それで、もう疲れ切つていたし、こちらのコテージを見つけたと

きは嬉しくて、それでもう必死だったんです」

コテージ。こんな掘っ立て小屋も呼ばれようによっては恰好がつかよようになるものだ。

「うん。まず、よかったね。山の中一人で寝ることになっていたら、きつと夜の闇が怖かったはずだよ」

一人きりでは、山の夜は怖いんだ。

緊張してしゃべっていた彼女も、盛られた菜飯を平らげると、やつとにこにこして話すようになった。

「なんでまた山ごもりなんて？」

彼女は、そうそう重要なことをまだ話していませんでしたね、という風に横手を打ち、それから少し思案顔をしたあと、またにっこり笑った。

「断食ダイエットです」

「ダイエット？」

彼女は頬の肉をつまんで、「こいつをどうにかしようと思って」とはにかんだ。

「これを食べてダイエット？」

テーブルの片隅に置いていたカップ麺を持ちあげて、それを意地悪く彼女の目の前で振ってみせた。

「それは、ですね。あの」

彼女は俯きざまに、「ただの非常食です」と言っ僕の手からカップ麺を取りかえした。

「断食って言っても、完全に飲まず食わずでは死んでしまうよ。どうしようと思ったの」

彼女は両手の上でカップの容器を転がしながら、あっちを見たりこっちを見たりしたあと、「考えてませんでした」と歯切れ悪く言った。

俯く彼女の表情に、せつなくなごみかけた空気が止めた、余計な言葉を後悔した。

それからしばらく彼女はつまらないカップ麺転がしに没頭し、僕

は特に関心のなかったぜんまいのきれはしを箸でつつき続けた。することのない僕と違って、目的を持って来た彼女にとってはこの時間も無駄なんだろうと思うと心苦しくなる。

「あの、朽木さんは、ここに住んでいらっしゃるのですか？」

彼女はカップ麺で遊ぶのに区切りをつけて、それをテーブルに戻した。

「え。ええと、うん。まあ、そうだね。ここに住んでいるんだよ」
もし継美さんがよかったら、ここで山ごもりしたらどうか。という提案は話の流れ上とても軽くしたものだったが、彼女には願ってもないことだったようで、謙虚に振る舞いながらもそれを快く受け入れた。

「これ見てください」

彼女はリュックから筆記用具一式と、小さいサイズのスケッチブック一冊を取り出した。

「これ一冊、山の景色で埋めるんです」

彼女は窓の外に視線を移し、まもなく外に色めく緑色に心を奪われた。

「せっかくだし、ダイエットって気張らずに羽を伸ばしたらいいよ。僕のことには気にせず、この小屋は好きに出入りしていいから」

彼女は笑顔で頷く。

短い会話ののちに、「気をつけて」と彼女を送りだし、さて一息つこうかというところで、はたと思いたって窓に駆けよった。

「夜はなにが出るかわからないから必ず帰ってくるんだよ！」

茂みに入っただけというところから、すんでのところで付けくわえた。

出し抜けに呼びとめられた彼女は驚いて振り向いたが、すぐに頷き、こちらに手を振った。

じつとその方向を見つめていた僕は、いつの間にか彼女を見失った。

視線を斜め上に向けると、原生林の緑と空の青との境がぼんやり

と交わつて揺らめく。視力が落ちたかと一度目を閉じて深呼吸し、もう一度見るとその境界はくつきりと見てとれた。

夜はなにが出るかわからない、というのはそのとおりで、山の奥から獣が出てくるかもしれないし、夜ごと姿を現わす不思議な火影が彼女を脅かすかもしれない。

部屋に向きなおり、その足でこの小屋で唯一の空き部屋に向かう。リビングルームは広い上玄関に直結しているから、夜になると当然冷えこんでしまう。いくらなんでも、そんなところに二晩も続けて彼女を泊めるわけにはいかない。

黒ずんだ木目の古びた扉に正対し、埃をかぶった取っ手に手をかける。

ゆっくり深呼吸をする。一回、二回、三回。

そして、そつと取っ手を引っぱる。

部屋は床の上一面になにに使うかわからない四角や丸の木片が散乱していて足の踏み場がないありさま。でもそれ以外は隅に木の机があるだけのただがらんとした部屋。最後に見た日より背丈が縮んだ机の上には寄木細工が整列してある。

どれだけかぶりに開かれたその部屋は、雑然としていてほこりっぽかった。

うん。これは掃除のやりがいがある。

ずつと閉ざされていたのに、小屋の南側にあつたせいかな陰気な感じはまるでない。換気さえすれば普通程度には。いや、僕の寝室よりもずつと住み心地はよくなるだろう。

よし、と腕まくりをして踏みこんだ部屋には太陽の光が一杯に充滿していて、その白に目眩を起こした。

細目を開けて見た部屋のなかでは、そこにあるすべてが色を失い、面影を残すのは一文字に渡す黒い窓の枠だけであつた。

白い帯でがんじがらめにされた身体は自由が利かず、かろうじて動く目玉を狭いまぶたの隙間からぎよるぎよるとさせる。

たぶん、僕を含む部屋のなかのすべてが同じになつていたが、長

い時間を掛けてついにみんな初めの姿に戻った。

まだくらくらする目をしばたたかせ、奥行き五メートルの四角い木箱を端から端まで見わたした。

それからまもなくして、部屋を満たす白い空気の正体が明らかになった。舞いたつほこりや塵の一粒一粒が、外の光を反射してちかちかと瞬き立っているのだ。

そこら中に降り落ちる淡雪を掻き分け、やっとでたどり着いた一番奥の窓の縁には、ふわふわが何重にも積み重なってこびりつき、それが一つの膜になっていた。

錆び付いて固くなった鍵を無理やり外されて、何年かぶりに外の空気を取りいれた小さな部屋は、それからどれだけ掛けても氣息が整わずに荒々しく呼吸を吸いこんだり吐きだしたりした。

僕はしばらく行き来する空気のされるがままになっていたが、とうとう決心して部屋の掃除を開始することにした。

日も落ちると、昼は夢だったように胸から喪失される。

彼女が帰ってきたのは、僕がふたつ目が三つ目の星を窓ガラスに見つけたときだ。

「朽木さん、戻りました」

振りかえって彼女と目が合うまで、僕はどこでなにをしていたのかも忘れていた。

「なにをされているんですか？」

「部屋の掃除。今は仕上げに窓の外枠の汚れを拭っていたところだよ」

彼女は荷物を草の上に置いて、僕の足下のバケツから雑巾を一枚手に取った。

もう終わるから大丈夫だよ。言ったか、言い留まったか思いだせないが、もし言ったとしたのならやめておけばよかったと思う。

彼女はそれからずっと、薄汚れた布でガラスに映る星の空を歪ませ続けた。

その薄い空を熱心に磨く彼女の傍らで、手の止まった僕はふたつの空のうちどちらだったか一方にただ見入っていた。

「わたし、どう考えても準備が足りなかったみたいです」
彼女が手を止めたのはその一瞬きりだ。

「半日、山のなかにおいていろいろ気づきました。朽木さんに助けてもらわなかったら、たぶん山ごもりなんて一日でギブアップしていたと思います」

「空身では気が楽な分大変なことも多いだろうね」

僕は彼女の拭いた窓の、残りの半分を擦りはじめた。

「ここには寝床もお手洗いもありますし、水も電気も通っていますし、それに」

それに、と言ったあと彼女は一拍おいて、「それに、朽木さんも

いますから」と続けた。

「変な意味で言ったんじゃないやありません。その、やっぱり山に一人ぼつんでは怖かったと思うんです」

彼女はしゃがんで、バケツの水で雑巾を洗いはじめた。

「うん。継美さんの言うこと、わかるよ」

一人きりでは、山の夜は怖いんだ。

僕の声は小さな水の音に溶け込んでなくなった。

「あの、朽木さんはここに暮らしていて、人恋しくならないのですか？」

立ちあがった彼女は黒い瞳を僕に向けた。

「ずっとだから、慣れたよ」

でも、そう。寂しくなるときは今でもあるんだ。

彼女は汚いぼろ切れを握りしめて静かな呼吸をした。

僕と彼女は、上空の風と真下の土とのあいだのなんでもない虚ろな夜に突っ立っている。

「山の風景は楽しく描けた？」

彼女から受けとった雑巾と自分のとをバケツに入れて、僕はそれを持ちあげた。

「ええ、でも。余計なことを考えてはばかりで、量はそれほど描けませんでした」

彼女はがっかり顔で、「景色はすごくきれいだったのに」と言い加えた。

「それじゃあ、今日一日はつまらなかつた？」

彼女は驚いた顔をして、か弱い首を激しく横に振った。

「それならよかつたね」

はい、と笑った彼女はさつき地面に置いた荷物を拾いあげる。

ふたつの空のあいだには、僕と彼女以外、本当になにもない。

朝焼けは外の空気も透明な窓ガラスも突き抜けて、わたしのまぶたにほのかな赤色を落とした。

厚ぼつたい寝袋のなかで、今日の日中は暖かくなりそうな空気を感ずる。

なんの準備もなしに来たのは痛かった。カップ麺一個ではどうがんばっても今日には帰らなくてはならなくなっていた。

わたしが山ごもりを続行できたのは、他ならぬ朽木さんのおかげ。わたしの憂さ晴らしなんか協力してくれる朽木さんはとてもいい人だ。

それに比べて。

思いだしてしまった嫌な顔を打ち消そうと寝袋のなか小刻みに身を震わせた。

今年のゴールデンウィークは一日の平日を挟んで大きくふたつにわかれた飛石連休で、その前半に彼氏と行った旅行は最悪に終わった。

倦怠期に入っていたのを気に病んでわたしから誘った旅行だったが、最後の日にケンカ別れをしたのだった。

おとといは一日学校だったけど、彼と顔を合わせることは一度もなく、電話一本、メール一通さえもなかった。

それで、連休の残りは山にこもって好きな絵を描いて気晴らししようと思ったのだ。

学校が終わってから出発したせいで、山の麓に着いたのは日も傾いた暮れ方。朽木さんが拾ってくれなかったら、想像以上に恐怖だった真つ暗闇に怯えて泣いていたことだろう。

うつらうつらと考えごとをしているうちに二度寝してしまうのは家にいるときと同じで、再び意識を取りもどしたのは部屋の戸の向こう側から人の活動する気配を感じとったときだ。

お世話になっっている身のくせに、二日続けて朝寝坊なんて。昨日起きたのなんてもう日が高くなってからだった。

わたしは寝袋から這いでてケータイをチェックした。

着信、メールともに0件。圏外だから、まあ当然。なんて、そんなことよりも現在の時刻は……。

時刻の確認のあと、わたしは伸びをして、それから窓枠に手を掛けて念のためにと太陽の位置も確認した。

太陽とわたしとを隔てるのは、昨日わたしと朽木さんとできれいにしたあの窓。

その向こうの太陽は、空の一番高い箇所ですぐ傍まで昇っていた。それでもきつと朽木さんは優しいんだ。

あいつなんてそんな思いやりを欠片も持っていない。

ふん、わたしに優しくしなかったことをいつか後悔するわ。彼がいなくたって、ほら、今だってもう素敵な男の人と同じ屋根の下で生活しているんだから。

部屋を出て早々に笑顔の朽木さんと顔を合わせて、ついさっき独り善がりの遠吠えに利用してしまったことを深く反省した。

「継美さん、おはよう」

「おはようございます。あの、ごめんなさい。わたしまた寝坊してしまっ」

朽木さんは、「気にしないで」とわたしの頭に手を置いた。

そこでわたしが無口になってしまったものだから、朽木さんは、馴れ馴れしくし過ぎたかな、という感じのきまり悪い顔でわたしの頭の上から手をどかした。

「ええと、昼食の用意はできているんだけど、たくさんはいららないかな」

「あ、はい。ダイエット中なので、せつかくなのにごめんなさい。少しだけいただきます」

ダイエット中なので、だって。そんなおかしなウソつかなければよかった。彼とケンカした腹いせに、なんて言えないけど、それな

らそうとただ絵を描きに来ましたって言えばよかったのに。ばかみたい。

「今日も絵を描きに行つてきます」

料理の盛りつけをする朽木さんは笑顔で返事をした。

「帰る日までにこのスケッチブックをいっぱいにできたら、そのなかで一番のお気に入りを朽木さんにプレゼントします」

朽木さんは、「楽しみにしているよ」と言つて小皿に盛つた山菜の和え物を差しだした。

「いただきます」

わたしは皿を受けとつて昨日と同じ位置に着席した。

「今日はどの辺りで描くかもう決めた？」

朽木さんも昨日と同じ席に着く。

「えっと。戻つてこられなくなると困るのでそんなに遠くへは行かないと思いますが、でも、まだなにも考えていません」

それなら、と手を叩いた朽木さんは、指であつちの方を指ししました。

「小屋を出たら、道に沿つてずっとこの方向に歩くと、景色のいい山川があるから。よかつたら行つてみるといいよ」

そういえば、初日に真っ暗ななかをさまよつていたとき、何度か川辺に出たりもした。

結構横幅のある川で、昼間はいいかもしれないけど、夜は真っ黒な川水に吸いこまれそうで近づくのが恐ろしかった。

「きつと気に入るよ」

わたしは笑顔で朽木さんにお礼を言い、それから少しのあいだ遠くの空を眺めて、最後にまた言葉を交わし小屋を出発した。

細い山道は辺りを鬱そうとした雑木林に囲われていた。

ここには、わたしが一步進むごとに、さにゆ、と言って土に埋まる下草と、そんなことが起こっているとも気づかずに上ばかり見ている大木しかない。

朽木さんと別れて以来、わたしと視線の高さが重なるものとは一度も出会っていない。

永久に続くと思つたひとつの風景は、あるときを境に遠くまで開けた川辺に変わった。

川縁は広い範囲で砂利がむきだしになっていて、わたしがそこに踏みこむと小石たちは軽い音を立てて転がった。

今し方まで見えていなかった空のずっと高いところでは大きな鳥が大空に影を映し、その下の水辺では小鳥がなにかをして遊んでいた。

木たちのさざめきは今はもう遠くて、ここには川の流れる音が満ちあふれている。

浅瀬に膝までつかった小鳥はわたしが近づぐことに大きくなり、程なく羽ばたいて、どこかへ消えた。

わたしは背負っていたリュックを砂利の上に置いて、小鳥がいたところに膝を抱えて座り込んだ。

水面を揺らすのはうんと遠くのなにかで、それがどんな力であるのか、わたしにはわからなかった。

眼を向けた川の向こう側もこちら側とさしたる違いはない。樹木は緑で雲は白。それらが馴染んだ川もそれはそれで深い青になったり透明な黒になったりとみんな好き勝手している。

そのなかのわたしも自由で、なんの予告もせずにリュックを近くに引き寄せて、なんの断りもせずにスケッチブックにそのすべてを描きはじめた。

胸がすくまで好きに絵を描いてやろうと、鉛筆をがりがりさせては紙をめくり、そうしてはまた鉛筆をがりがりさせさせた。

そうしているうち、おしりに食い込む小石の痛みには耐えられなくなった自由なわたしは、スケッチブックをほっぴり出して砂利の上にごろんと寝転がった。

手の平で顔を覆い太陽の日射しから眼を守りながら、身体をもぞもぞさせて具合のよい体勢を探った。

わたしは思いついて自分にルールを課した。

魚が跳ねるまで絶対起きあがらない。

指の隙間から覗く空はちっぽけで、そこを時々黒い影が渡ったりもした。

わたしがどこまで行こうとも、空はいつも同じ間隔を保ちながら背中につきまといてくる。町を離れたこんな山のなかにまでも。

でも、追ってくるのはそれだけで、彼に所属するもの 彼の生身の身体も、彼の想いも追っては来なかった。

今日は遠方からの風が小さな夏を連れてきたためにとっても暖かい。

一瞬か、それかとても長いあいだ失っていた意識を取りもどしたのは、リュックのなかのケータイが鳴った気がしたためだ。

身体を起こそうととっさに全身に力を入れたが、さっき決めたルールを思いだして、ぐっとそこで思いとどまった。

ふとしたときにルールを定めるのは小さい頃からの癖で、そのひとつひとつは今まで確実に守ってきた。一種の願かけで、きちんと守れた暁には必ずいいことがあると信じている。

寝たままの体勢で手を伸ばしてリュックを掴まえ、なかからケータイを取り出す。

圏外につき着信、メールともに0件。

そうだった。

ケータイをリュックに戻し、目を閉じる。しかし、まもなくまぶ

たになにかの影が重り、なんだろうとまた目を開く。

「朽木さん」

横になつたまま出したかすれ声は、朽木さんに届く前に薄くなつて散つた。

空の光は朽木さんの輪郭に縁取られ、そこから零れた色と形のないう矢がわたしのまわりに降り注がれた。

「山菜採りの途中なんだけどね、もしかしたら僕が教えた川に継美さんが来てるかなと思って川沿いに歩いてきたんだ」

朽木さんが遮られなかつた光の矢は、雲の流れに合わせて濃淡を強くしたり弱くしたりした。

「起きないの？」

「え。あの、ええと」わたし、魚が跳ねるまで起きられないんです。わたしの言った言葉に、朽木さんは事情を掴みきれないという顔で首を傾げ、少し考えたのちにまたふつと笑顔を作つた。

「魚なら今さつき跳ねたよ。僕が脅かしてしまつたせいだね」

わたしの言葉を受けいれてくれた朽木さんに面食らつてしまい、朽木さんをしばらく無言で見つめて、それからのっそり起きあがつた。

「朽木さんのおかげだわ」

髪を払いのけたわたしは、川に向かって両膝を抱えた。

わたしは隣に座つた朽木さんの顔を見ることができなかつた。

何時間か前までは少し格好いいなと思つていただけなのに、今は寝転がっていたところを見られてこんなに恥ずかしく思うなんて。

それは、なんでもない時間の不思議で、なんの力も加わっていないはずの心が絶えず変化するのだ。

ちょうど目の前の水面を揺らす力がどこからかやってくるのと同じで、わたしの心もうんと遠くのなにかから影響を受け続けている。

「僕がすっかり小石を蹴つ飛ばしてしまつたんだ」

わたしは朽木さんの方を見て、ぱつちりと眼が合うとすぐに逸らしてしまつた。

「そうしたら途端に継美さんが動いたから、その音に気づいて目を覚ましたと思っただけけど、違ってたかな」

そうか。その音で起きたのかも。

「こんなところで寝て身体は痛くならなかった？」

「ええ、少し。でも、もう大丈夫ですっ」

わたしはそんなことをしゃべりながらも、髪はくしゃくしゃになつてないかとか、横顔は変になつてないかとか考えを巡らせた。

そんなわたしは、せせらぎの音を見ながら、それでいながら一心に朽木さんを横目で見つめた。

「ほら」朽木さんはわたしを見た。

「袖が少し濡れちゃってるよ」

「えっ」

わたしは左腕を上げて確認した。

「本当だわ。……失敗」

わたしが肩をすくめて笑うと、朽木さんも一緒になつて笑った。

「さっきはなにしてたのかな？」

「あ、ええとですね」

わたしはまた視線を気持ち安らぐ方に戻した。

「眠つてた、は眠つてたのですが、その前はちゃんとスケッチブック一冊制覇の目標に向けて絵を描いていて、けどこの陽気になんだかうとうとしてしまつて……。ええ、でも一瞬です。本当に一瞬だけ寝てしまつたみたいで、それから目が覚めたんです。それですね、この、ええと、これは『携帯電話』つていいまして」

朽木さんは笑つたまま、知ってるよ、と言った。

「えっ、と、そうでしたか。あの、ええと……、ごめんなさい」

わたしだったら、恥ずかしい。朽木さんが文明から少し離れて生活をしているものだから、なにも知らないんだと勝手に決めつけてしまった。

「気にしないよ。大丈夫」

なにを言えばいいのかわからなくなった。わたしは身体を縮こま

らせて俯いた。

真下にあるたくさん的小石はわたしの影の色に染まり、そのうちのひとつは執拗な袖の滴りを受け続けていた。

「僕はね」

朽木さんは言った。

「子供の頃、あの小屋に父親とふたりで住んでいたんだ」

わたしは頭を上げて朽木さんの方を向いた。

朽木さんは、なにを思う表情でもなく、ただただまっすぐ前を見つめている。

「子供の頃から、ずっとですか？」

「いや、小学校に上がるくらいまでだったかな。それで何年か前にふとここを思いだして、また住みはじめたんだ」

朽木さんはこちらを向いて、おかしいかな、と微笑み、また川に眼をやった。

「そうは言っても、冬には雪が積もる前に山を下りるんだけどね。ここに来た最初の年に山の冬を身をもって体験して、一人の力じゃとつても冬は越えられないって確信したんだ。残念ながらね」

「それじゃあ、あそこは朽木さんの別荘みたいなものかしら」

「別荘？」

何気なく言った言葉に朽木さんは盛大に笑って、「ただの山小屋に別荘はよかったね」とまた大笑いした。

わたしがむくれてなにか言い返そうと朽木さんを見たとき、朽木さんの眼は真剣なものに変わっていた。

それで、そうかな、うん、言われてみればそうだな、そうだそうだが、とかぶつぶつ言って、くるつとわたしに笑顔を向けた朽木さんは、もうそれ以外に考えられない、と言ってわたしの意見に同意してくれた。

「つまり、継美さんは僕の別荘の初めてのお客さんっていうことになるね」

嬉しそうに言う朽木さんよりもわたしはもっと嬉しくて、また顔

を膝の陰に隠した。

それからわたしはずっとそのままの体勢でいた。そうしていると、神経は次第に研ぎすまされていって、髪にあたる風や、遠ざかっていた草木のさざめきを微かに感じとれるようになる。大岩にぶつかる川のしぶきはさつきよりも多く、細かくなり、鼓膜を振動させる。

そういえば、わたしが踏んづけた草は死んでしまったのかな。あの声は死に際の叫びだったのかも。

さにゆ。さにゆ。

そう思うと、耳から離れない。

あの草たちはまだ生まれたばかりだったのかな。いや、もしかしたらもうお年寄りだったのかも。

きつとここにいる木々のほとんどは、誰もわたしよりずっと長いあいだ生きているんだらうな。

わたしは、今考えたことをそっくりそのまま朽木さんに話すことにした。

あの新緑の若葉も長い月日の末には散るんだらうとか、さつき朽木さんが跳ねるのを見た魚も岩にぶつかって突然死んでしまう日が来るのかもしれないとか、思うことは取り留めなく胸から溢れでた。朽木さんは黙ってそのひとこと、ひとことを受けとめる。

本当は朽木さんの顔を見たいけど、眼が合ったら照れくさくなるから、わたしは下を向いたまままで話を終えた。

朽木さんは小石をひとつ拾って、それをよどみなく流れる川の水に放り入れた。

「そうだね。葉はいずれ散ってしまうし、魚もいつかは死んでしまっ
うね」

わたしは顔を少しだけ上げて、朽木さんを盗み見る。

朽木さんは、川か、そこにいる魚か、それか対岸の木々のすべて

を見やっていた。

「それに、山の木のほとんどは、ぼくたちの生まれる前から、ずっとそこにあるんだろうね」

わたしは、朽木さんがなにを見ているのか、視線の先をそっと調べようとしたが、遠い景色の途中視線を見失った。

「でもね、この山には新しく生まれる木もあるよ」

朽木さんは立ちあがって、もう一度太陽からわたしを隠した。

「絵、がんばって」

朽木さんは山菜のたくさん詰まった袋を拾いあげて、少しずつわたしから離れていき、ついにはわたしの目で追える範囲からいなくなっただ。

あれからわたしは空の鳥を数えたり、丸い石を探したりした。そのあとも後かたづけをもたもたとしていたものだから、最後にリュックの中身を確認しようとしやがみ込んだときには、空はもう鮮やかな赤に染まっていた。

中空の空気を焼く静かな夕日は、わたしの手の甲にほのかな赤色を落とした。

変わったのはほんの些細なこと。

今日が昨日よりも少し暖かくなったことと、それから、少し前に出会った大人の男性にちよっとだけ惹かれたこと。

ただ、それだけ。

真上に架かる天井の板の遙か上、朝霞も抜けたそのさらに向こうで夜は白々と明けた。

それでも起床するにはまだ早く、前髪を掻きあげた手はそのままにどのくらいかの時間が過ぎた。

つい何分か前に入り口の戸が音を立てたのは確実に、不安感が眠気に勝るのにはそれからいくらかも時間を要さなかった。

空気の粒子も凍てつくような朝ぼらけに、布団を出たばかりの身体は音を立って固まった。そうはいつても、そのまま動かずにいようものなら、冷水の粒を吸い入れた皮膚はたちまちに冷凍魚の鱗になっただろう。

身体が、床と同じぎしぎしという音を立てる。

彼女に貸したかつての僕の部屋の戸は開きつばなしで、なかに彼女の姿はない。さらに、やはり入り口の戸の鍵が開いていたことから察するに彼女が小屋を出て行ったのは十中八九間違いない。

この寒いのに、彼女が着ていた服はたいした厚手のものではなかった。

一度自分の部屋に戻った僕は、羽織ったオーバーとは別にもう一枚厚いのを手に小屋を出た。

外の立ちこめる霞に気後れはしたが、それもほんの一瞬で、まもなく遠く聞こえる草踏む音を追いはじめた。

彼女が何者なのか知らないし、考えればこの小屋を訪ねてきたのも本当はどんな目的があつてのことかしれない。

それを思うと、彼女はその手口を常習とした物取りで、今まさに消え失せようとしているのか。あるいはただ夢を歩いているのか。そのどちらなのか、どちらでもないのかさえも僕に判断できることではなかった。

いずれにせよ彼女を引き留める以外ないのだが、ある程度まで距

離を詰めたところで彼女を呼びとめるのを躊躇した。

彼女はあっちへ行っただかと思えばこっちへ行ったりして、その宛てのない足どりは僕には恐怖だった。

怖い。

それでも僕は、いつも努めて平気なふりをした。

初めての山の夜も、夜の火影も、姿や声がわからないものが本当はとても怖いのに、その臆病をひた隠しに隠して澄ました顔をしてきた。

一人でいるときさえもそんなだ。

「継美さん」

彼女の前ではどうにか恰好がつくようにと努力した。

その彼女にこんなにも怖じけるなんて。つくづく嫌になる。

「朽木さん？」

応答があつたのは、彼女が動きを止めて一呼吸おいたあとだった。声さえ聞ければもう大丈夫だ。半透明の白い幕の向こうで僕に返事したのは、僕がそうあってほしいと思う彼女そのものだ。

「おはよう。日が昇りきらないあいだ、ここは冷え冷えの冷蔵庫だよ」

近づく度にはつきりと現れてくる青白い肌の彼女は、どうしてか困った顔をした。

「おはようございます。ええ、冬みたいな寒さで驚きました。……あの、どうしてこちらにいらっしやったのですか？」

僕がオーバーを渡すと、彼女はお礼を言ってそれに袖を通した。

「うん、目が覚めてね。継美さんが外に出て行ったみたいだから、こんな早くにどうしたのかなと思って追ってきたんだよ」
彼女はジッパを上げて白い息を吐いた。

「勝手にごめんなさい」

「怒ってるわけじゃないからいいんだよ。だけど心配だったから。なにかあったの？」

横を向いた彼女は顔を一層険しくさせた。

それに僕は、僕が思うよりも突っこんだことを彼女に訊いてしまったのだと悟った。

「笑わないでくださいね」

彼女以外のすべては寒さと静寂にまだ凍りついている。

今日は少し寒くなる。暖かかったのは昨日の一瞬で、今日は再び春に戻った。

「手紙を」

彼女は僕を流し目に見た。

「手紙を、送りたいと思っただんです。それでポストを探していましたが、やっぱりなかったみたいなので」

「ポスト探し？」

早朝から。山のなかで。

突飛なことに僕は声を出して大笑いした。

「ああ。ごめん、笑っちゃったね」

まだ笑いかみ殺している僕を見ずに、彼女はばつが悪いといった面持ちで下を向いている。

「うん、ポストか。麓まで下りればあるんだけど。そうだね、笑ってしまったお詫びに、今日はそこまで案内させてもらえるかな」

僕には計り知れない部分を彼女は持つている。

それというのは、不可解な行動はもとより、もう眼を上げてにこやかに首を縦に振ったこの感情の転換の素早さに他ならない。

男性と女性は根本的などころが違っている、といつか聞いたことがあったが、彼女の場合それが色濃く出ているにすぎないのだろうか。

「それじゃあ、外はまだこんなに寒いことだし、とりあえずは小屋に戻ろうか」

一面に敷かれた霞を身にまとった彼女は、穏やかに笑った。

彼女はなにををするにも密かに緊張していたが、さすがにもう慣れ
てきたようだ。

昨日の夕飯からはダイエットのことも口にしなくなり、今朝の朝
食も遠慮なしにすっかり食べきってしまった。

僕の支度を待つ彼女は、玄関から頻りに「まだですかー。まだで
すかー」と言ってくる。

せっかく麓まで下りるのだからと、買うものはないかとか、他に
用事はないかとか、おとなげなく気持ちがつわつてしまう。

「ごめん、待たせたね」

大きな黒い瞳はじつと僕を見つめた。

「ああ、本当にごめんね。すぐに出発しよう」

そう言うと、彼女はにこっと笑ってこぶしを振りあげた。

「手紙はちゃんと持った？」

「はい、このとおり」

彼女はなにか文字の書かれた紙切れをちらつかせて、それをリュ
ックに突っこんだ。

「ポストまではどのくらいですか？」

手に持っていたリュックを背に乗せて、彼女は元気に声を張りあ
げた。

それにしても、郵便箱を目指して男女ふたりが息んで早立ちしよ
うとは、こんなに滑稽なことがあるだろうか。

特に足どりの軽い彼女は僕の半歩先を歩く。

「一、二時間かな。山の入り口まで行くから、継美さんもここに来
るとき通ったと思うよ」

「あそこまでですか」

うなだれた彼女は、今までよりも歩調を半歩遅らせた。

草と花屑を踏みならす音は、ふたつ整ってなだらかな並木の斜面

を下った。

「昨日は少し暑いくらいだったかもしれませんか」

「そうかな」

「ええ。もう終わりが間近ですけど、それでもこの季節にはこれくらいが一番です」

同じ晴れでも昨日とはだいぶ違っていて、こんなにつららかな日より心はとても幸せになる。

高い木々に囲まれてはいたが、枝葉の隙間から洩れる柔らかな日の光に辺りはほの明るく照らされていた。

「朽木さん」

通り風に僕が目を閉じたときだ。

「あの、朽木さんは山にこもってなにをしているのですか」

彼女は風にさらわれた髪留めを拾うように、くずれた髪を手で直しながらそう僕に訊いた。

なんだろうな。うん。そういえば、わからない。

などとは言えずに、僕はしばらく黙りこむ。

「朽木さん？」

「うん、ごめん。ええと、なんていうかな。別になにか怪しいことをしているわけではないんだけどね」

言いよどんだ言葉に僕がなにか隠しごとをしていると思ったのか、彼女は訝しげに僕を見張った。

「あ、本当だよ。人里離れた山の奥に住んでいるからって、本当に怪しいことを目的にしているんじゃないんだ」

怪しくない、の一点張りはまさしく怪しさの極みで、それで疑いを晴らそうとするなんて、まだ大海をこの手で塞ごうとする方が可能性があるというものだ。

「そうだね……、うん。ただ、そこでじっとしているのが性に合っているのかな。だから、山にこもっているんだろっね」

「ただ、じっとしているのが？」

「そう。……こう、地に根を張ってね」

口を利いてくれた彼女に僕はそっと胸をなで下ろした。

しかし、それはともかくとして、今度は尋常でなく熱いまなざしを向ける彼女の心情が汲みとれず、いたく困惑した。

「わかります！」

急に興奮した彼女は、僕も知らない僕の心理をああでもない、こうでもない、と自問自答でした。そうして導き出された彼女の結論で、ついに僕は悟りを開いた隠者にまで成り上がったのだった。

「他にもいろいろと用事があつて時間が掛かると思っています。わたしのことは気にしないで朽木さんはご自分の用事をなさつてきてください」

町の小さな郵便局の前で、それじゃあ、と彼女と別れて、僕は向かいのスーパーに向かった。

彼女はなんだかんだ言つても手紙を出す程度の用事なのだから。十分、二十分の買い物でも彼女を待たせてしまつていたのでないかと心配になり、最後には店内を小走りまでして買い物ものを済ませた。

郵便局の前では、やはりとうに用事を終わらせて待つていたらしい彼女がリュックを手に持つてぶらぶらさせている。

「ごめん。待たせたかな」

彼女は首を左右に振つて、ぶらつかせていたリュックを背負つた。

「ほら、こんなに買ったんだけど少し買いすぎかな」

彼女は小首を傾げる。

「はは、わからないよね。久しぶりの買い物ものだから、これで多いのか少ないのか、僕にもよくわからないんだ」

ほころんだ彼女の口元は、またすぐ元に戻つた。

身体にほろほろと降りかかる光を地面に落としながら、僕と半歩後ろの彼女は来た道を戻りはじめる。

それにしても、さっきからどうも様子のおかしな彼女が気になる。

不機嫌、というよりも、なにかに落胆しているようで、

「なにかあつた？」

とも訊けずに、お互いが黙りこくつたまま山道の入り口まで来てしまつた。

ほんの十数分待たせた程度で腹のうちの煮やすような人でないことは承知している。

そもそもが赤の他人で、ただ数日だけの付き合いなのだから、互いの胸のうちの詮索し合ったり、思うことを主張し合うべきではないと心得てはいる。だが、それでも、表面に表れた悲しみのようなものを見つけたからには、それを取り除いて元気になってもらいたいと思うのは伊達や酔狂ではなく人情の常だ。

「継美さん」

彼女は、なんでしょう、と言ったか言わなかったかわからないが、そういう感じにこちらを向いた。

「今日は夜におもしろいことを考えているんだ。だから、楽しみにしててね」

彼女は少し思案顔をして、でも弾んだ声で「ありがとございませす。楽しみにしてます」と言い、笑った眼を僕に向けた。

それから彼女は夜になるまで、昨日までと同じように絵を描いた。今日は熱心に小屋のまわりばかりを描いていたようで、昼すぎには小屋に戻ってきて一緒に昼食をとった。

それでも彼女がダイエツトに触れることはなかった。

ふたりで小屋を出発したのは割と早い時間帯で、帰ってくるのもそれほど遅くはならないと予想していた。それなのに、日付が変わった今もこうやって外をふたりで歩いているのは、彼女が夜突きを思いのほか気に入ったからだ。

「すぐおもしろかったですっ」

彼女はそればかり言っつて、ヤスを振りおろす素振りをしては大喜びした。

「夜突きは継美さんのお気になりましたかな？」

僕が持つカンテラの明かりが彼女の笑顔を揺らした。

「だって、簡単にこんなたくさんの魚が！」

川魚が一杯に詰め込まれた袋を、彼女は両手で胸先まで持ちあげた。

僕は最初に何回か手本を見せただけで、僕と彼女が手分けして持ったくさんの魚は、そのほとんどが彼女の振りおろすヤスに仕留められたものだ。

歩きはじめてかれこれ一時間は経とうとしているのに、未だ小屋に到着しない。これは僕が思いついて寄り道を決めたせいだ。

ふたつある僕の特別な場所のうち、片方にでも人を連れていくのはこれが初めて。

会話の区切りごとに彼女が訊く、「どこに連れていってくれるのですか？」はこれでもう何度目だろう。

「着いてからね」その度に僕は言った。

彼女との話し声と、時々僕の持つヤスが片脇の木にぶつかってか

つかつと立てる音以外は、なんのことはないただの肌寒い月の夜。
「持ちにくくないですか？」

右隣の彼女は歩きながら体を前のめりにして、僕の左手を覗き込んだ。
「大丈夫、大丈夫。継美さんこそ、その魚重くない？」

右手に持つカンテラで、彼女が右手、左手と何度も持ち替えている大きな袋を照らした。
「わたしも平気です」

彼女はもう一度それを持ち直して、我慢強く言った。

僕は、うん、と頷いて袋とヤスを足下に置いた。

「茂みに入るよ」

彼女もそこに袋を置いて、身軽になった両腕を小刻みに振りながら道を外れた僕についてきた。

「ほら、これ。見てごらん」

僕はしゃがんでカンテラを低い位置につきだした。

「これ？」

真っ暗な闇のなかに、僕と彼女だけがぼんやりとした明かりに照らされる。

「ごめんなさい。暗くてよく見えないわ」

「うん。昼でもね、ここは暗いんだ。まわりに高い木がそびえてるから、葉越しの月明かりもここまでは少ししか届かないんだ」

真剣にそこにあるものに焦点を合わせようとする彼女を、僕はこっそり見つめた。

「枯れ木が横たわってるわ」

瞳にカンテラと月の明かりの束を集めた彼女はそう呟く。

「まわりの木と比べて細いのね。種類が違うのかしら」
彼女は言い添えた。

「この木はね、生まれてすぐに死んでしまったんだよ」

僕は、もう腐ってぼろぼろになったその木に視線を落とした。

「運が悪かったんだ。ちょうど背の高い木々のあいだに生まれてし

まったから、他の木たちに太陽の光を遮られてしまつて」

僕は深呼吸して、久しぶりに会つたその木に手で触れた。

「もつと高いところを目指してずっとがんばっていたのに、ついに力尽きてしまつたんだ」

「朽木さんは、この木にお詳しいんですね」

僕は、顔を上げた彼女と視線を合わせた。

「この木は僕だった。と、いつからかそう思っているんだ」

カンテラの明かりが、映す影をゆらりとさせた。

「人に生まれかわつたんだ」

おかしなことを言いだしたと不快に思われてはいないだろうか。

彼女は顔色ひとつ変えずに木を見つめている。

「僕はね、昔来た場所つて、風景とかランドマークとか、そういうのじゃなくてね、なんていうかな。漠然とした雰囲気っていうか、その場所特有のにおいみたいなもので覚えているんだ。それで、子供の頃ここにそういうにおいを感じたんだ。そのとき、子供ながらもつと昔ここにいたことがあつたんだつて思つたんだ」

そう、そうだった。人に話すことなんてなかったから、ずつとうちに秘めていたけど、言葉にするといろいろ思いだす。

確か父親が亡くなって、それをきっかけに山を下りることになつて、あれは、きつと親戚かな わからないけど、他人の家ですつと暮らしていたんだ。それも中学までだったな。あとは自力で高校を出て……。

「朽木さんつて、その、わたしと似た考え方をお持ちなんですね」
曖昧な記憶の風景は消えて、夜の景色と、淡い色の彼女が目の前に現れた。

「わたしも子供の頃はよく、前世はああだつたんじゃないかとか、こうだつたんじゃないかとか考えました。それで、わたしは生まれてくる前はかわいい小鳥だつたんだつてずつと思つていたんです」

彼女は、女の子の勝手な憧れですよ、と笑つた。

幼い頃の夢が再現したこの場所では、土の唸りも、ほのかな風の

歌声もはつきりと耳に聞こえた。

「この木は、まわりの木に邪魔されない、高い高いところに焦がれていたんだ」

ここからは遙か遠い、あの木の頂点より先に。

「報われない恋をしていたのね」

「片思いだから切ないね」

「ううん、そんなのわからないわ。お互い思い合っていたかもしれないのに。ええ、それなのに、遠すぎてお互いの想いが通じ合えないなんて……」

やっぱり、切ないかも、と彼女は言った。

その木は、ずっと高いところの、日の光を目一杯に浴びる小さな鳥に憧れていた。

そんな僕の枯れた表皮を彼女は優しく撫でて、ちよつと悲しい顔をした。

雲のない夜空に切れ長の月が浮かぶ今夜は特に暗い夜だ。木々の陰でなくても、照明がなければ歩くことさえままならない。

「遅くまで付きあわせて悪かったね」

彼女は大きな袋を膝にがさがさ当てながらゆっくり歩いた。

「いいえ、わたしの方が夜突きにすっかりはまってしまつて。でも、朽木さんがあんなワイルドな魚捕りをするなんて意外でした」

もしかして、がたいがいいだけの優男と思われていたかな。

「もつと意外なことを教えようか」

笑わないでくれるかな、と言う僕を彼女は、「今朝方、笑わないでつて言つたわたしを朽木さんは笑いましたよ」と非難した。

「参つたな」

彼女は一笑して、「大丈夫です、絶対に笑いません」と約束した。

「本当に？」

彼女は僕の眼を一心に見つめて固く誓つた。

僕は咳払いをして心を落ち着かせる。

僕が、臆病な僕の話を他人にするのはこれが初めてだ。初めてどころか、生涯そんな話をすることはないと思つていた。

夜の火影や、草を切り裂く音、それに天井を揺らす大きな影。

僕はあの小屋に再び住みはじめたその日から、それらが怖くてしようがなかった。

「子供の頃はそんなのなかったと思うんだ」

彼女は笑わなかった。

「僕はね」

本当は恐がりなんだ。

ちようど今ごろの時間だ。僕の部屋には得体の知れない光が見え隠れしだす。

「靈感のようなものですか？」

「わからないんだ。もしかしたら、幻覚や幻聴かもしれないし」
ただね、怖いんだ。

カンテラが照らす細い山道に視線を落とす。疎らに生える草の影で地面が斑に染まり、伸び縮みする模様はカンテラの真下に吸い込まれては後ろへと流れ消えていく。

僕はただ単にその話をしようと思っただけで、それで彼女になにか言ってもらいたいとかはなかった。でも、それにしたって、いつまでも押しだまったままの彼女には、さすがに不安が募る。

気づかれないようにちらりと窺った彼女の眼は、なにもない夜の空に向いている。

僕も彼女の見る空に眼を送った。

大空の闇に飲み込まれた僕の心がそこでたゆたって見える。と、それとは対照的に際やかな光が突然空から流れ落ちる。

「朽木さんっ、今流れ星が！」

足を止めた彼女は、僕も確かにそれを見たことを確認すると満足げにまた進みだした。

「流星群が来ているんだ」

だから、残念だけど流れ星はロマンチックな偶然じゃないんだ。

「でも、朽木さん」

うん。でも、そのときにふたり居あわせたのは少しロマンチックな偶然かも。

彼女が言い止めて口に出さなかった続きを密かに想像した。

「朽木さんが見る夜の光って」

僕の考えたことが通じてしまったのか、彼女の頬がほのかな赤に染まっているように見える。

「山って空に届きそうなくらい高いじゃないですか。だから、もしかしたら毎晩流れ星が朽木さんの部屋を通っているのかも」

彼女は照れた顔に微かな朗色を浮かべて僕の眼を見た。

「ありがとう。もしそうだったら、すぐロマンチックだね」

ああ、なんだか話してよかった。

もし僕が子供で、それで母親がいたとしたら、きっと今みたいに安心させてくれるんだろうな。

「ねえ、朽木さん」

彼女は僕を包むような声で言った。

「あの木だった頃は叶わなかった望みなら。今度こそ、ずっと恋していたかたの傍まで行ければいいですね」

夜の深いところで彼女のまなざしは特に際立つ。

外で見た綿雲は空にふわりと浮かんでいて、わたしをなんとなく物悲しい気分させた。

「おはよう。今日も早いね」

リビングルームに戻ったわたしは、大あくびをしながら部屋を出てきた朽木さんと鉢合わせになった。

「今日もポスト探しをしてたのかな？」

「おはようございます。今日は深呼吸をしてきただけですよ」

笑顔を交わしてすぐに、朽木さんは洗面所に入ってしまった。

わたしは椅子に腰を下ろして窓越しに空を眺めた。

青に薄ぼんやりと馴染んだ雲ばかりの空で、さっきまであったはずの綿雲はもう見えなくなっていた。

わたしは慌てて寝袋が広げっぱなしの部屋に飛び込み、その窓からも空を見上げたけど、でもやっぱり見つけることはできなかった。

きつと朽木さんを騙してばかりいる報いだ。

ポストを探していたんです、だなんて。本当は、彼からのメールを確認しようと思って、朝からこっそり抜け出して電波の届く場所を探していただけなのに。

朝の光を吸いこんでふかふかに膨らんだ寝袋に腰を埋め、深いため息をついた。

朽木さんは、へんちきな女、とも思わずに信じてくれた。

本当、胸が痛い。欺きとおすために小細工まで用意して。

わたしはリュックから四つ折の紙切れを取りだして、またため息をつく。

スケッチブックの最後の一枚を破り取って、『ずっと遠くから見えていました。あなたのことが好きです。』なんて適当に殴り書きした宛名のない即興のラブレター。

こんな一行二行程度の手紙で繋がるものなんてないのよ。

わたしはそれをくしゃつと握ってリュックに突っこんだ。

雲の隙間から出てきた太陽は部屋に向けて一直線に光を放ち、わたしと、部屋の隅に集められたおかしな木工細工を優しく照らした。

「今日の夕方帰ります」

そう告げたときの朽木さんの顔に、わたしははっとした。

数日間でも一緒に生活したのだから、礼儀的にでもいくらかは惜別の素振りを見せてくれるのではないかと期待していたが、朽木さんの表情から感じられた思いがけないほどの寂寥感はわたしの心にも伝染した。

「あの、お世話になったのに急なことを言ってしまった」

「いや、いいんだ。ごめんごめん。ほら、ここで悠々自適の生活を送っていると細々した時間の感覚がなくなってしまった。だから、もっと長い時間この状況が続くんだったら勝手な勘違いをしてしまった。そうそう、ゴールデンウィークだったね」

朽木さんは照れ笑いをして、ぽんと手を叩いた。

「約束があったね。スケッチブックをいっぱいにできたら、そのなかの一番を僕にくれるって」

どう、描き上げた？　と言う朽木さんに、わたしは椅子に座り直して返答をあれこれと思いめぐらせた。

もう、あと少しなんです。でも、最後の最後でなにを描いたらいいのかわからなくなってしまうて。

そう言うのと、笑顔の朽木さんはすぐにわたしを連れ出した。

この山にある素敵なお客を朽木さんは知り尽くしているんだ。わたしはそんな場所に招待される度、弾む心を胸の奥にしまい込んで朽木さんにぴったりついて歩いたのだった。

「きつとこれで最後だから、一番の場所に連れていくよ」

はつと胸を突かれたのは、朽木さんの言葉に最後なんてことを意識したせいだ。

今日もふたりに草を踏み歩く。

さにゆ。さにゆ。

朽木さんはわたしのために時間を割いてくれているのだから。わたしは歩いているあいだ中、とぼとぼ、という足音を朽木さんに聞かれてしまわないように、足先に視線を落として注意した。

湿地が続く木洩れ日の山道には、黙ったままの朽木さんと、俯きっぱなしのわたしとがつけた足跡だけが残った。

わたしは口を開く時期を逸してしまい、ついにひとつの言葉を交わすこともないまま朽木さんの足が止まった。

「僕の特別な場所だよ」

湿っぽくて寂れた山の中腹。

一面の沼地は、そこいっばいが白と緑に埋め尽くされていた。

「ここはミズバショウの群生地なんだ」

朽木さんは手の動きで促し、わたしを一步前に出させた。

萌葱の葉に包まれた白は、少し冷たい空の下、彼方まで咲きそろっている。

「子供の頃、初めて父親に教えてもらったときから、ここは僕の秘密の場所なんだ」

朽木さんの秘密の場所。そこに朽木さんといるのはすごく嬉しかったのに、彩りに惑わされたわたしは言葉をなくしたままでいた。

山中で猛威をふるう雑木もここでは散り散りに生える程度で、宙に渦巻く光が直下したミズバショウの白さは、目の前で一層に増した。

「それじゃあ、僕は行くけど大丈夫かな。一人で小屋に戻るね」

わたしは反射された光に眩んだ眼を朽木さんに向けた。

「昨日連れていってもらった朽木さんの木の近くですよ。大丈夫です。場所、わかります」

絹のような光たちが紡ぐ小さな道は、この場所から生まれて延びていったみたいで、朽木さんは、じゃあね、と言ってそこに消えていった。

もしかしたら一緒にいてくれるかもしれないと期待していただけ、

朽木さんの素っ気なさが痛かった。

そうよね。朽木さんだつて自分のしななければならないことがあるのに、こんなな構ってくれたことに感謝しなくちゃ。

非望を諦め、土の乾いた部分を探してそこに腰を下ろした。

去年の秋頃からわたしと彼は停滞気味で、初めて大喧嘩した日のオレンジ色が宵闇に溶けていく夕空を思いだすと今でも頭がくらくらする。

このあいだの旅行は、憂さを払拭し、暗澹とした関係をどうにかしたいと思って持ちかけたのに、まさか決定的な大喧嘩をしてしまう羽目になるなんて。

もう、彼とはダメね。

わたしは足を放って吹き抜きの空に瞬いた。

昨日、麓まで下りたときにケータイをチェックしたけれど、彼からはやっぱりなにもなかった。

今日から授業があつたのに、休んでしまった。本当は昨日の夕方には帰ろうと思つていたのに、今日まで山ごもりを延長してしまつたのは、そういうやけを起こす原因があつたのに加えて、朽木さんが夜突きに誘ってくれたのも理由のひとつだった。

そんなことを考えたわたしは、すぐ頭に握り拳をぶつけた。

朽木さんをいいわけにするなんて。あのお天道様はなんでもお見通しよ。きつとまた天罰が下るわ。

わたしは、それでもこの思い出を忘れさせるのだけはやめてください、とお願いした。

それは、なんでもない時間の不思議で、たった四日前はがちがちにこわばって話をしていた人と、今ではすっかり自然に言葉を交わしている。

バス停の小さな待合所には、わたしと朽木さん以外誰もいない。壁に貼られた時刻表を確認してくれている朽木さんの隣で、わたしは春の雲が消えて薄暗くなった雨降りの空を眺めた。

「小屋にあった時刻表は、やっぱり合っていないかったね」

朽木さんは二本の濡れた傘を壁に立てかけ、腰掛けにわたしと隣りあって座った。

「小屋にあったのは古かったから。念のため早く出てきてよかったね」

わたしは頷いて、小さな窓にあたる雨の向こうに耳を澄ませた。

わたしが、「バス停まで一緒に来てください」と言うと、朽木さんは笑顔を零した。わたしがそんなこと言わなくても、朽木さんは絶対送ってくれたんだ。

朽木さんはたぶんなんとも思っていないのだろうけど、でも、それはわたしの特別な想いを込めたお願いだったのだ。

雨脚はいよいよ激しさを増し、外でバスを待つノツポの標識が、砕けた雨粒にほのめいて見えた。消えかけた地名は雨にかすんでここからは読みとることができない。

車のエンジン音が聞こえると速くなる鼓動を、わたしはその度 handsの平で抑えつける。

そつと目を閉じて雨がアスファルトを打つにおいを感じとる。

左の肩先に朽木さんを微かに感じながら、言葉のない最後の思い出は時間と同じ速さで胸に刻まれてゆく。

それは朽木さんと一緒のときに見る最後の暗闇で、このすべてが飲み込まれてなにもかもがなくなる直前まで朽木さんは隣にいた。

そして、そこから風景がぼつりぼつりと生まれくる。緑、太陽、川、約束、土、寒さ、夕闇、空気、白、雨。生まれては消えていった。それらは、ここに降り立ってからまたここに帰ってくるまでのあいだに、朽木さんと見たにおいと色のひとつひとつだった。

なにもかも消えてもとの黒に戻ると、また生まれはじめる。ただただそれを繰り返さず。葉、青、木片、水、まなざし、緑風、明かり、望み、透明、嘘、坂道、星、花、雲。

「バスが来たね」

突然わたしに傾れこむのは、懐かしい朽木さんの声と、まだ降っていた外の雨だ。

朽木さんは傘を一本取って、わたしを入り口まで導いた。

「朽木さん。あの、ありがとうございました」

向こうから迫るバスがわたしは憎らしくなった。どうしてわたしにこんな酷いことをするのだろう。

「継美さん」

顔を上げて、と朽木さんは言った。

わたしは、今日まで朽木さんにかけてきた心配や迷惑への自省の念が重くのしかかる首を、ゆっくりともたげた。

「よかった。お別れの前にまたお互いの顔を見ることができたね」

久しぶりに見た朽木さんの顔は、在りし日に見た笑顔と同じままだった。

「朽木さん」

わたしが伝えたかった言葉は、目の前で止まったバスの轟音に掻き消されて、そのまま胸の深くに封じこまれた。

「何日もご迷惑をおかけしました」

朽木さんは、そんなことないよ、と首を振って、開いた傘でバスと待合所とのあいだに小さな雨よけの橋を架けた。

「だけど、継美さんの絵を見られなかったのは心残りかな」

「ごめんなさい。やっぱり全部は描き上げられなくて」

わたしには自分で決めたルールを本気で守るおかしな癖があった。

「うん。しょうがないよ」

朽木さんは本当に残念そうだった。

わたしは朽木さんの橋をくぐり、バスに両足を乗せて振り向いた。
「さようなら、朽木さん」

笑顔で返した朽木さんのお別れの言葉に、わたしも笑顔を返した。

「今日の雨がこの春最後の雨かもしれないね」

最後に聞こえた朽木さんの声は、閉まったバスの扉に遮断されてしまい、なにを言っていたのかはつきりわからなかったし、今はもう覚えていない。

わたしを最後部座席に乗せた貸しきりバスは、朽木さんがいた町から遙か遠く離れたところを走っている。

リュックからスケッチブックを取りだし、ぱらぱらと紙をめくる。そこに収めてある紙のすべてが山の風景に埋め尽くされていた。

完成できなかったのは最後の一枚だけ。『ずっと遠くから見えました。あなたのことが好きです。』なんて適当な文にミスバシヨウの絵を添えた、宛名のない未完成のままの手紙。

わたしは、生まれてくる前に渡せなかったラブレターを、多くの木々のあいだで横たわるかつての思い人にそっと添えてきた。

その傍にいた下草の声まねを試みる。

「さにゆ」

出来が気に入らなくてももう一度試す。

「さにゆ」

閉じたスケッチブックをリュックに戻して窓の外に視線を向ける。飽きもせずわたしを追い続ける空は今日に限ってぼうつとしている。やがて、いくつ目かのバス停に差しかけたとき、はたと気づいてケータイの電源を入れると、それはささやかなメールを受信した。つまらない差出人に、つまらない内容。一応、姿を眩ませたわたしの身を案じていることはわかる。ごめんのひとこともない適当な

文章だけど、それでも、まあ、心配して送ってきたんだ。

そうね。もしかしたら、こんな一行二行程度の手紙で繋がるものもあるのかもしれない。

ケータイの画面を開いたまま、無数の雫がシャボン玉のように弾ける窓に再び視線を送る。

ぼんやりとした町のなか、しぶきを上げて進むバスのなかに乗客はわたし以外誰もいない。

さようなら。

わたしは、胸に訪れた春の訪問者を、静かにその奥底に納めて広い車内を眺めた。

たぶんすぐに止む夕べの雨も、今はまだ窓の外を濡らしている。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8631s/>

春の訪問者

2011年5月2日16時40分発行